

釧路湿原

釧路湿原には、多くの稀少・固有な動植物が暮らしています。絶滅が危惧されているタンチョウ（学名：Grus japonensis）の集団が日本で唯一生息しているほか、最終氷期からこの地域に存在している種もあります。この原始的な低地は、日本最大の湿原を形成しており、その環境は約 6,000 年前に海面が下がって以降ほとんど変わっていません。釧路湿原はラムサール条約（Ramsar Convention）で保護されています。ラムサール条約とは、湿地の保存のための国際条約です。

氷期

約 3 万年前、(ウィスコンシン氷期と呼ばれる) 最終氷期の中でも一番寒い時期の間、海面は現在より 100m も下がっていました。当時は、陸橋が樺太島を通して北海道とユーラシア大陸をつないでいました。それにより、動物たちが大陸から北海道に渡ってきました。数千年にわたって気温が上昇すると、氷河は溶けて海面は上昇し、現在釧路湿原となっている地域は海に沈みました。

海の変化

およそ 6,000 年前に、気温と海面が再び下がり、この低地は陸地になりました。先史社会の人々は、釧路湿原の周囲にある高台沿いに貝塚を残しました。これらの貝塚は、海面が時とともにどう変化してきたかを示しており、かつては海岸線がさらに内陸側にあったことが分かります。海岸線が退いた後には、いくつかの湖と池が残りました。